

# 第13回 教行信証に学ぶ会 講師:延塚知道先生 【ライブ版】

2021(令和3)年12月16日 会場 円徳寺

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。  
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。  
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇すること難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

## 講義 1

こんにちは。雨の中をようこそお出かけ下さいました。大変ありがたいと言うか、皆さんおひとりおひとりのお心に心から敬意を表します。それぞれお忙しい中に、この時期わざわざお出かけくださるについては、いろんな思いがあってお越しになってくださっていると思います。一人ひとりの思いは分かりませんが、ただまあ親鸞聖人は「まあ、そう心配するな」と(笑)。「仏様の覚りの中にあるんだから、南無阿弥陀仏と念仏して仏様にまかせなさい」と。それと、「仏法の友達がたくさんおるんだから、その方々と愚痴を言い合っても、励まし合っても、そしてこの世を少しでも元気に生きてくれ」と。「そのために私は『教行信証』を書いたんだ」と。こうおっしゃってくれてますから、どうか難しいとは思いますが、そういう親鸞聖人の思いを受け止めていただければ大変有難いと思います。難しくても、なんか帰る時に元気が出てくださったならそれでいいと思ってます。

私もバタバタしております、大変申し訳ないと言うか、先ほど田畑先生がおっしゃってくださったように、テープ起こしまでして下さって残して下さる、大変なお仕事で、私個人としては、大変恐縮と言うか申し訳ない気がいっぱいなんですけども、ただ、私の意見を申し上げるわけではありません。親鸞聖人がおっしゃっている通りに申し上げているつもりですので、その点はテープ起こしして下さっていることに少しでも私としては耐えて、恥ずかしいというか、申し訳ないという思いを何とか耐えていつているわけでありませう。

まあ、バタバタしております、12月に入って1日の日から新潟の高田で『大経』をお話しし、三日ほどお話して、その後仙台で報恩講を二日勤めまして、その後今度は函館で別院の定期の講座で『大経』の講義をしてまいりました。九州から函館まで全部電車で参りましたので、とんでもない時間がかかりまして、帰ってきて、またバタバタして、今日は田畑先生の会ですのでね、また明日は行橋で坊守会でお話して、一日置いて、今度はまた新潟の三条でお話をしたて帰ってくるということで、まあよくもってるなあと思います。もう70歳を過ぎてますのでね、体がよくもっているなあと思いますが、お話をすると元気になるのです(笑)。私が元気になってね、まあ多分ころっと死ぬと思います。それでもいいと思うて、

まあ個人の仕事ならばお断りするのですが、やはり責任がありますので、宗門に対して大きな責任があるのでね、死んでも行かなくてはいけないと思って頑張っております。

皆さんと『教行信証』を拝読しておりますが、なかなかさらっと読んだだけでは難しいと思います。けれども宗祖は十分に練って練って練り上げてお書きになった『教行信証』ですから、引用される文章も、なぜこれを引用したのだろうかと思って、悩みながら考えていると、ある時宗祖の深いお心が分かって、「あ～あ、すごい人だ」と思うことがよくあります。それほどまでに練り上げられた『教行信証』ですから、なかなか難しいと思いますけれども、今は「行の巻」の、特に『大経』の祖師たち、龍樹(150-250年頃)、天親(別名世親、300-400年頃)、曇鸞(476-542年)ですね。この『大経』の祖師たちを決めたのは、親鸞聖人が、大変謙虚な方ですね。「私じゃないんです」と。曇鸞大師がお決めになって、曇鸞大師の『論註』をよく読めば、龍樹、天親のお二人のお心をちゃんと受け止めておられる。だから『大経』の祖師は龍樹に始まって、天親、曇鸞というところで一応完結しているということをお私たちに伝えてくださるような引用の仕方になっているわけです。

皆さんは原文を読んでいませんので、龍樹の『十住毘婆沙論』とか天親菩薩の『願生偈』、それから曇鸞大師の『浄土論註』、その原文を全部読んでいませんから、この引用されているところだけを見ていますから「ああそうかな」と思われると思いますが、全部読んでいる方からすると、なんでこの文章を引用したのだろうか、こう言うことをすぐに思うわけです。しかしそこには親鸞聖人の深い意図があるわけですから、それを少しでもお分かりいただけるようにと思ってお話をしています。

それで、今申し上げましたように、曇鸞大師ははっきり申し上げますが、龍樹と天親を大変大事な祖師として、これは、お二人とも大乘仏教を始めた方だと言ってもいい。龍樹菩薩は大乘の「空」の覚りを初めて発表された方です。ですから龍樹は、これは第二のお釈迦様だというふうに言われて、皆から大変尊ばれた方なのです。

それから、世親菩薩は龍樹の少し後に生まれてまいりましたけども、龍樹の空の覚りと言うのは、親鸞聖人もおっしゃるように「法身は、いろもなし、かたちもまします。しかれば、ころもおよばれず。ことばもたえたり。」(『唯信鈔文意』東聖典554頁、西709～、島20-8)と言いますね。つまり私たちの分別とか言葉の世界ではとてもつかみきれない。もしつかんだとしたら、それは間違い。もう一度申しますよ。「法身は、いろもなし、かたちもまします。しかれば、ころもおよばれず。ことばもたえたり」。そういう空の覚りがどうして分かるのか。そして分かった龍樹に「空の覚りとはどういうことですか」と聞くと、龍樹は「うん、そのどういうことですかと聞いて理解しようとしているでしょう。それはちがう」と。「それなら空と言うのは空っぽのことですか」と聞くと、「うーん空っぽということも言葉でつかまえて理解しようとしているでしょう。それも違う」と言って、ともかく龍樹は空の覚りについての問いに全部「違う、違う、違う…」というふうに人間の分別を全部排除する。だから「八不中道」(はつぷちゅうどう)と言われます。八方ふさがりです。どんな意見も全部違うと言って人間の分別を否定するわけです。それは全体から言えば空の覚りというものは、これは分別ではとらえられないということですね。

ですから世親は、それならつかみどころがないから、それなら人間の意識の方を一回分析してみましようというので、眼(げん)、耳(に)、鼻(び)、舌(ぜつ)、身(しん)、意(い)。「六根」。それが人間の意識ですね。ですから見る眼、眼(げん)、聞く耳、耳(に)、鼻(び)、鼻で嗅ぐ、舌(ぜつ)、舌で味わう、それから身(しん)、身で触る、それから心、意(い)、心。それが人間の意識ですね。その全体を統一している自我がありますから、それを末那識(まなしき)という。だから人間は自我というものの上に意識がずっと積み重なってあるというふうに考えるわけです。

ところが自我だけなら、酒を飲んで酩酊することがあるでしょう。皆さんはないですか、僕はすぐにあります。自我が飛んでしまう、我も忘れて。それでも酔いが覚めるとまた自分に戻っているでしょう。それから寝る時もそうでしょう。夜、寝て、その時は自我は休んでいる。寝ていますから。ところが朝起きて違うものにはなっていないでしょう。また、同じ自分になっているでしょう。ということは自我よりももっと深い無意識のところでは自分を支えている意識がある。それを阿頼耶識(あらいやしき)という。そんなふうに意識を分析して行って、その意識を、意識が間違いである。人間の意識は迷いであるということをお

はっきりさせて、空の覚りを示す。そういうふうな方法でないと空の覚りは私たちには分からないから、今度は、私たちの方を分析して行って、そしてこれは迷っていると、はっきり迷いということが分かったら、覚りが反対にあるわけですから、覚りに導くというふうに、「空の伝統」と、それから「唯識の伝統」と大きな二つの流れが大乗仏教の始まりなのです。

ですから普通、ちゃんとした学者だったら、龍樹と世親とは違う流れだから「『大経』の仏教者が」、なんていうことは訳の分からない話、とんでもないことになる。「大経」と言うよりも、この人たちは浄土教ではなくて、例えば『涅槃経』、それから『般若経』、それから『華嚴経』、そういう大乗の諸経典によって空の覚りを明らかにした人と、それから迷いを明らかにして空の覚りに導いた人と、この二人の方を一つだと見るような眼はだれにもないわけです。今の大学の仏教学の先生でも「そんな無茶苦茶なことを言うな」と言っていると思います。

ところが、そのお二人は実は一つなのだと、一人なのだと。そしてそれは「二人とも『大経』の本願に立った仏教者なのだ」と見た方が曇鸞大師です。そこに曇鸞大師の素晴らしい功績と言うか、とんでもない功績と言うか、人が思いつかないと言うか、考え付かないような功績を残してくださったのが曇鸞大師の功績なのです。ですから親鸞聖人はその功績を曇鸞大師に返して、曇鸞大師が龍樹と天親をお一人の方として「『大経』の仏者」として位置づけたのだということをしかりとこの『教行信証』でもおっしゃろうとしていると思われまふ。

親鸞聖人は偉いでしょう。あんな偉い方ですけど自分の手柄にしない。「ちゃんと曇鸞大師が教えて下さったことなのだから、私はただ頭を下げて聞くだけです」と。こういうふうな言い方で『教行信証』全体が引用されているということがよく分かります。それで、今私が申し上げたように、ちょっとだけ細かなところを読んでいると時間もかかりますし眠たくなりますので、全体の流れが分かるようにお話を申し上げます。

まず、今日は曇鸞大師の『論註』の方を皆さんに見ていただきましょう。この間そこまで行っていなかったですね。ですから、今日はそっちの方を見ていただきます。東聖典167ページ、その終わりから4行目のところから「『論の註』に曰わく」とありますね(西154～、島12-16)。これは『論註』と言う書物の一番最初の文章で、龍樹菩薩の難易二道釈、難行道と易行道の二つの道があるというところの文章です。さっと読みますよ。意味は分かりますから、「『論の註』に曰わく、謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案ずるに、云わく、分かるでしょう。『論註』は世親菩薩の『浄土論』の註釈なのに、註釈の最初は龍樹菩薩から始まるわけです。

「謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案ずるに、云わく、菩薩、阿毘跋致(あびばち)を求むるに、二種の道あり。一つには難行道、二つには易行道なり。難行道は、いわく五濁の世、無仏の時に於いて、阿毘跋致を求むるを難とす。この難にいまし多くの途あり。粗五三を言て、もつて義の意を示さん。一つには、外道の相 修習(しゅじょう)の反 善は菩薩の法を乱る。二つには、声聞は自利にして大慈悲を障(さ)う。三つには、無顧の悪人、他の勝徳を破す。四つには、顛倒の善果よく梵行を壊す。五つには、ただこれ自力にして他力の持(たも)つなし。これ等のごときの事、目に触るるにみな是なり。たとえば、陸路の歩行はすなわち苦しきがごとし」。

ここまでが難行道なのです。龍樹菩薩が菩薩道として説いて下さった難行道です。それは今申し上げましたように、この世で自分の力で覚りを開く。それはなかなか難しい道であると。なぜ成り立たないかということをも五つ述べて、最後には「ただこれ自力にして他力の持(たも)つなし」。自力で何事もできると思つて仏様の他力と言うことが全く分かっていない。そこに難行道が成り立たないという大きな理由があるのだと、こう言つて、その次に、

「易行道」は、いわく、ただ信仏の因縁をもつて浄土に生まれんと願ふ。仏願力に乗じて、すなわちかの清浄の土に往生を得しむ。仏力住持して、すなわち大乘正定の聚に入る。正定はすなわちこれ阿毘跋致なり。たとえば、水路に船に乗じてすなわち楽しきがごとし。この『無量寿経優婆提舍』(うばだいしゃ)は、けだし上衍(えん)の極致、不退の風航なるものなり。「無量寿」は、これはね、今まで読んだところは「二道釈」(にどうしゃく)と言われるところですが、その次のところは、これは「題号釈」(だ

いごうしゃく)なのです。『無量寿経優婆提舍願生偈』の題号を註釈するところですから、普通は二道釈で終わるのです。ところが親鸞と言う方は恐ろしい人でね、二道釈に題号釈を引っ付けて引用しているわけです。つまり二道釈の続きとしてこれを引っ付けているということになります。そうするとどうなるかというと、「無量寿」はこれ安楽浄土の如来の別号なり。釈迦牟尼仏、王舎城および舎衛国にましまして、大衆の中にして、無量寿仏の莊嚴功德を説きたまう。すなわち、仏の名号をもって経の体とす。後の聖者・婆藪槃頭(ばそばんず)菩薩、如来大悲の教を服膺(ふくよう)一升の反して、経に傍えて願生の偈を作れり、と」。ここまでで、そうすると二道釈の難行道・易行道と言う易行道は、実は「仏の名号をもって経の体とす」、『大経』によって、名号による仏教なのだということがよく分かります。そして如来大悲の教えをこの身に頂いて名号によって仏道に立ったのが世親菩薩だ、というところまで引用しているわけです。これはすごいです。私は『論註』を一所懸命読んでますけど、この二道釈に題号釈を引っ付けてここまで引用すると言うのは、うん、親鸞と言う方は偉い人だと(笑)。これでよく分かります、易行道が名号による仏教だということがね、本願による仏教だということがよく分かる。とりあえず、これは二道釈と題号釈、これがまず引用されます。そしてその後、読んでいきますと、本当は読まないといけないのですが、読んでいきますと長いですから解説します。ここは「我一心」、「世尊我一心」の註釈、そしてそのあと「帰命尽十方無碍光如来」は、「帰命」はすなわちこれ礼拝門なり」とありますね。ですからここは「世尊我一心 帰命尽十方無碍光如来」、それから169ページの6行目のところ、ここに「願生安楽国」は」とありますね(西157、島12-17)。そうするとここは言うまでもなく世親の「願生偈」の帰敬偈、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」、この註釈になっているわけです。そうですね、間違いないですね。二道釈が終わりますと、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」、これは世親の『浄土論』で言えば「帰敬偈」(ききょうげ)と言います。帰敬偈と言うのは分かりますね、「世尊よ！」と叫んでいるわけです。「お釈迦様！」と。「あなたが説いて下さった『大経』の尽十方無碍光如来に私は一心に帰命します」と。そして「お釈迦様が『大経』で説いて下さった安楽国に生まれたいと願います」というふうに、『大経』にひれ伏して、『大経』のお釈迦様に頭を下げて、「私は『大経』の通りにこれから生きていきたいと思う」と言うことが述べられている部分です。ですからこの「帰敬偈がある」ということが実に大切なのです。帰敬偈がない論書もたくさんあるのです。ところがこの世親の『浄土論』は短い書物ですけども、今言うように『大経』に帰命します」と。そして『大経』の覚りの通りに生きていきます」と。簡単に言えばそう言うことですね。そう言うこと、皆さんどうですか、はっきりそれを表明できますか。なかなかむずかしいでしょう。それを世親はちゃんとこういう言葉で表明した。だからここが一番大事なのですよと言って、今私が申し上げたような意味を、曇鸞大師は一つ一つ註釈していつているわけです。「これは信心を表すのですよ」と言って註釈していつてます。この「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」という註釈が終わると、次のページを開けて、170ページ。今度は「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」という、これは世親菩薩の「願生偈」で言えば「発起序」(ほつきじょ)と言われます。皆さんと一緒に『大経』を読む時に『大経』の発起序は、お釈迦様と阿難の出遇いが説かれていました。そうですね。ですから『大経』の発起序というのは『大経』が説かれるきっかけになった。それが発起序の役目です。ですからここでは、私は「修多羅」と言うのはこれは『大経』ですよ。『大経』の真実功德、『大経』に説かれる覚り、真実功德、それをまとめて偈(うた)にした。そして仏教と相應したいと思うと言って偈にされた。だから「願生偈」が説かれる元々の発起の心を表しているから、だからここは世親の「願生偈」では発起序と言われるところ。それが引用されています。そして、ここは、その発起序がずっと説かれていつて、長いですよここは、170ページの終わりから4行目まで。「与仏教相應」は、たとえば函蓋(かんがい)相称するがごとしとなり」。ここで終わるわけです。そして最後に「いかんが回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえに」とのたまえり。」という回向の、特に往相回向を表す文章が出てきます。それで終わります。要するに、私が申し上げたいのは、『論註』は「二道釈」と「帰敬偈」と「発起序」の註釈が出て、そして「往相回向の文章」で終わる。これだけの引文なわけです。ところが、これは『論』の註釈ですから、ですから『論』もこの通りにならないといけないわけ

です、世親の『浄土論』も。世親の『浄土論』は、167ページ6行目を見てください。「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」、ここです。そして不虛作住持功德の文章と回向の文章が出てますね。そうすると、つまり僕が言いたいのは、『論』は「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」、ここからしか引いてないのです。そうしたら冒頭「帰敬偈」の「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」のところはどうなっているのやということになりますね。それは、前から私が申し上げてますように、実は、二道釈は龍樹のお仕事ですから、龍樹の引文のところで申しますと、易行品、165ページ(西151、島12-13)、「また曰わく、仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり」。ここに易行道釈があるわけです。二道釈が出て来るわけです。それから帰敬偈、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」、これは前回の講義の時に申し上げたと思いますが、166ページの龍樹の偈、「弥陀章の偈」、ここに「無量光明慧、身は真金の山のごとし。我いま身口意をして、合掌し稽首し礼したてまつる」と出てきますね。この「稽首礼」、「我帰命」と言うのが、曇鸞の註釈でいうと168ページの終わりから4行目ですが、「龍樹菩薩、阿弥陀如来の讚を造れる中に」、さっきの「弥陀章の偈」です。あの弥陀章の偈の中に「あるいは「稽首礼」と言い、あるいは「我帰命」と言い、あるいは「帰命礼」と言えり」と、そう言っています、龍樹が偈の中で。「この『論』の長行の中に、また「五念門を修す」と言えり。五念門の中に、礼拝はこれ一なり。天親菩薩すでに往生を願ず、あに礼せざるべけんや。かるがゆえに知りぬ、帰命すなわちこれ礼拝なりと。しかるに礼拝はただこれ恭敬にして、必ずしも帰命ならず。帰命は(必ず)これ礼拝なり。もしこれをもって推するに、帰命は重とす。」こんなふう「帰命尽十方 無碍光如来」のところに龍樹の弥陀章の偈を持ってきているわけです。つまり世親は「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」と言ったけども、龍樹は弥陀章の偈の中で、ちゃんと「帰命来」とか「稽首する」と言ってるでしょうと言って、「帰命尽十方 無碍光如来」のところに龍樹を持ってきている。ですから、先程見ましたように世親の『浄土論』は、「我依修多羅～」からしか引用してないのだけでも、それなら「世尊我一心～」はどこにあるのと言ったら、易行品の「二道釈」と「弥陀章の偈」の龍樹のところにある。だから龍樹と天親を一つにして、曇鸞の全体の『論註』が出来上がっているということになっているわけです。親鸞聖人がそう言う引用の仕方をしているわけです。ということは私が申し上げましたように、龍樹と天親を一人の人として見て、そして『論註』全体が成り立っているというふうに引用しているということは、実は龍樹・天親・曇鸞と言う『大経』の伝統は曇鸞大師の『論註』がお決めになっているのですよと。どうか『論註』を読んでほしいと。見てごらん、「世尊我一心」、ここは龍樹でしょうと。「我依修多羅」、ここは世親でしょうと。龍樹と世親を一つにしたのが『論註』全体ですよと。こう言う引用の仕方をしているわけです。分かりますかね。皆さんは、「はああ、それがどうしたの？」(笑)と言う感じかもしれませんが、それがどうしたのと言うけど、そういう引用の仕方をしているというのは、これはとんでもないことでね、僕は長い間、申し上げますが、「なぜ世親の『浄土論』が我依修多羅から始まるのか」意味が分からない、こんなの。しかも不虛作住持功德と回向の文章とのたった三つですよ。なんでこんな引用の仕方をしているのか意味が分からなかったですよ、十年以上。最近になって、よく心を澄まして読むと、なるほど『論註』の中にちゃんと龍樹と世親が一緒にいるでしょうと、こう言いたいのだと思うとね、まあ親鸞聖人という人はなんと偉い人だと。曇鸞大師に功績を譲りながら、「龍樹・天親・曇鸞と言う『大経』の伝統、を決めたのは曇鸞大師です」と、こう言っていることになります。そのへんが親鸞聖人の偉いところだというふうに僕は感動しています皆さんは、「それがどうしたの？」(笑)思うかもしれませんが、まあ、こんな引用の仕方をするというのは、まあすごい学者というか、まあ大したものだと思います。それと同時になんというか親鸞聖人の偉さね。ぴたっと頭を下げて頭をあげない。龍樹、天親、曇鸞の伝統にぴたっと、『大経』に頭を下げて自分の頭をあげない。ちゃんと曇鸞大師が言っている通りですよと、『大経』の伝統を教えてくださいというのが、こう言う引用の仕方になっているわけです。お分かりいただけますかね。(会場から質問者 S)先生すみません。早すぎて分からないんですけど、僕だけかもしれませんが、天親を三つしか引用してないと仰いましたが、その場所と項目をもう一回仰って頂けませんか。(先生)親鸞聖人は、いいかね、「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」を引用しているね。そして「観仏本願力 遇無空過者 能令速満

足 功德大宝海」、これを引用しています。そしてそれは回向だという文章があるね。そうすると、いいかね、『論』は「我依修多羅～」からしか引用していないわけ、『論』は。だから『論註』も「我依修多羅～」から引用すればいい。『論』の註釈だから、『論』と『論註』とちゃんと合うわけです。(質問者 S)今先生がずーっと説明されたのは、親鸞聖人が『浄土論』、『論註』から引用したところですね。

(先生)そうそう。(質問者 S)それで、今先生が仰った、親鸞聖人は『浄土論』(「願生偈」)からは、三つしか引用してないということですか。

(先生)そうです。はい。

(質問者 S)はいはい、分かりました。

(先生)「願生偈」からは「我依修多羅～」からしか引用していない。

(質問者 S)今先生が白板に書かれているのは親鸞聖人が引用した部分ですよ。(先生)これは『論註』の引用した部分です。だから『論』の註釈だから本当言うと、「世尊我一心～」から引用して、『論』はここからあるのだから、『論註』もこれだけでいいはず、『論』の註釈ですから、二道釈、題号釈の部分はどこにあるのかというと註釈だけにあって『論』にはないじゃないかと、こうなるのです。だから『論』にないところはどこにあるかと、さがすと龍樹のところとちゃんとあるでしょうと。そうすると曇鸞は龍樹と天親を一つにして、『論註』を親鸞聖人が引用しているということになります。言っていること分かりませんか。分からんのは西藤君(質問者 S)だけらしい(笑)。そう言う引用の仕方になっているわけです。これは親鸞聖人が意図してそうしたのだから、意図があるはずですよ。どこに意図があるかと言うと、それは龍樹と天親は一つなのですよ。『大経』と言う經典においては、大乘仏教の流れから言うと大きな潮流として、これは一つにはならないかもしれないけど、『大経』に立った人と言う意味からすると、一つなのですよと見たのが曇鸞大師であり、それを引用の仕方であえて曇鸞大師に功績を譲るのだというふうに引用した親鸞聖人の意図はそこにあるというふうに思われます。いいですかね。お分かりいただけましたね。まあそういう引用の仕方をして、『大経』によって一つなのだ、龍樹と天親は一つなのだ。空の覚り。だから逆に言うと、いいですか皆さん、お念仏によってはじめて信心を頂いたと言う時には、空の覚りに立ったと言うことと一緒になんです。それは龍樹のところと言ったように、初歡喜地の菩薩と同じ境地なのですよと、こう言っているのです。分かるね。だからあんまり卑下したらいいけません。いいですか、「凡夫、凡夫」と言って卑下したらだめです。空の覚りに立ったのだと、それが初歡喜地の菩薩だから。龍樹のところでありましたね、念仏者は初歡喜地の菩薩なんだというふうにありましたね。だから空の覚りに立ったということと一緒になんですよと。それからもう一つは、ちゃんと世親菩薩が偈(うた)で歌っているでしょうと。これが大事なよ。もうねえ、涙が出るほど大事なよ。「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」と。こういうふうに世親菩薩が感動を偈にしてくれました。いいですか。さっき言った信心を頂くということは、ある面言えば、龍樹の空の覚りに立ったのだというふうに言っても間違いではありません。ところが、空の覚りを表そうとしても表す言葉がない。だって「こころもおよばれず、ことばもたえたり」とこう言うのですから、表す言葉がない、それを言葉にして偈にして下さった。ここに実は世親菩薩の大きな功績があるのです。という意味で、この不虛作住持功德の偈を親鸞聖人はあげて下さっているわけです。いいですか。浄土教は凡夫の仏教だから、あるいは自力無効だからと言って、凡夫凡夫というところにあまり中心を置きすぎて、要するに単純な話ですが、仏教はお釈迦様が説いた覚りが手に入らなければ仏教ではありません。そうやね。だから願生とか往生とか浄土ということを読きながら覚りが手に入るのだということを言わないといけません。実は世親は空の覚りをこんなふうな言葉(「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」)で表してくださっている。しかも「仏の本願力を観ずる」、観ずると言うのは「他力の信心」だと親鸞聖人がちゃんと言ってますから。「他力の信心を頂けば空しくすぐるものはない」。これは広く言えば、今の人間世界は、どなたでも何をやっても満ち足りないし、何をやっても虚しい気がする。一体この年まで何をしてきたのだろうか、広く言えばそういう意味も包みます。包みますが、ここで言っているのは、「他力の信心を得れば仏になるということが決定する」という意味で「空しくすぐる者なし」と言っています。成仏が決定するのだと。何故なら阿弥陀如来の覚りに包まれているからですよ。こういう意味なのです。この中でどう?「他力の信心

をいただいたよ！」と言う人がおるやろう。手あげてくれ。(笑)

(会場から)あつ、手あげてますよ。

(質問者 O)先生、ちょっとお尋ねします。先程来、龍樹と天親を並べて引いておられるのは、それは一つであるということの意味するのだということと言われて、それは大変な事だと、皆さん分かるかと、ケロツとしているのではないかと言うお話がございましたが、誠に私もケロツとしておるのですが、引用というものを出すときには、その目的とつづまりというものがあるわけですね。ちょっと行巻のページをめくってみて、軽々しく申し上げて恐縮ですが、聖典の流れを見ると、そのつづまりは「六字釈」になっているように思いますが？(先生)うん、まあまあ、それで結構ですが、つづまりは信心が決定することです。『大経』の信心が決定することです。それが龍樹と天親のつづまりです。龍樹と天親は『大経』がなければ、大きな大乘仏教の祖師として別れてしまうけど、『大経』の本願に帰するという意味では一つだと言うのが親鸞聖人の見方です。だから、つづまりは本願にある。名号に帰するということにある。そうでなければ龍樹と天親を一人とは見れません。だから本願に帰するということはどういうことかという偈をちゃんと述べている。これが空の覚りと言ってもいいし、涅槃の覚りだというふうな、「覚りを得たのだ」ということを言っているわけです。いいですかそれで、一応。

(質問者 O)あの、167ページに龍樹の偈と天親の偈が引用されておりますね。続けてあがっておりますね。そこで不虛作住持功德が出ておりますね。それは、その目的性を暗示しているということですか。(先生)そういうことです。はい。この引用の仕方ですが、もし「『浄土論』に曰わく」と言う文章だけなかったとしたらね、これずっと続くのです、偈が。167ページ1行目から、「諸仏無量劫に、その功德を讚揚(さんよう)せんに、なお尽くすことあたわじ、清浄人を帰命したてまつる。我いままたかくのごとし。無量の徳を称讚す。～我依修多羅 眞実功德相」と。こういうふうに、「我は眞実功德の相に帰依します」と続いていくでしょう。だから、この龍樹の弥陀章の偈は「世尊我一心」と本願に帰依した時の感動を偈にしたものであると。だから世親菩薩のところから言えば、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」の「帰敬偈」のところにあたりますよと。これが龍樹の弥陀章の偈に当たりますよと。こういう意図があるのだと思います。いいですか。

(質問者 O)はい。ありがとうございました。

(先生)いやいやすいません、まことに。参考書に書いてないのですから、初めて聞くと何のことと思うかもしれませんが、CDを聴いて、10回くらい聴いてください。そうすると分かるから。(笑)

(会場から)10回聴かんと分らん。(先生)そうそうそう。それはそうですよ。親鸞聖人はこれを書くのにどれだけ勉強したと思ってますか。そんな簡単には分かりません。私は何十年勉強してきたと思ってますか、それは思い付きで言ってるわけじゃない。絶対そうなっている。それはやっぱり親鸞聖人のご引用の意図があるわけです。そのご引用の意図のところね、「まあ偉いなあ」と思わざるをえないでしょう。そんな引用になっているということ。そしてどういようですが、もし『大経』の本願の教えがなければね、これは龍樹と天親というのは大乘仏教を広めた方ですから、これは二つを一緒にするなんてとんでもないと。ところが曇鸞のように、『大経』の本願に帰依したのだと、そこから見ればこれは一つなんですと、こう見ると、曇鸞大師がおっしゃってるでしょうと。こう親鸞聖人が言ってることになります。ですから、つづまりは何かと言えば、それは「阿弥陀に帰依している」ということ。だから龍樹は「帰敬偈」。阿弥陀の讚を歌っている。そして世親も私は「願生偈」に、帰依していますと、「我依修多羅」、「『大経』の眞実功德に帰依して、仏教と相応しています」と。その相応の歌こそ「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」という偈ですよと、こう言ってる。だからここに、そのつづまりとその覚りがある。浄土教も覚りがなければ大乘の仏教にはなりません。凡夫だけれども覚りをいただくのだということがある。覚りと言ったら皆さん語弊があるというふうにするのなら、私がよく申しますように、生まれたときはみんな仏様の世界に生まれたんですよと。ところがいつの間にか人間だけが仏様の世界を忘れてしまった。今も忘れてしまっている。けど、今も仏様の世界にあるんですよと。それを何とかして知らせたいと言うのが『大経』です。そして阿難が、私は覚りも悟れないし、それから、できが悪いと。覚りも悟れないのだと。「よう言うた」と。阿難でも、「お釈迦様、あなたを今日は阿弥陀如来と仰ぎます」

と言って、阿弥陀如来に帰依したわけです。その時にお釈迦様の教えが、私たちの分別を破って、今いつも計算して苦しんでいる。いつでも自分を立てて苦しんでいる。いつでも自分を譲らないところに暗い顔になる原因がある。それをよく教えて、初めて仏様の世界にひっくり返す。もともとあった世界にひっくり返すのだと。だから覚ったと言わずに「海だ」と、これが浄土教の覚りの名前だと思ってください。「海」。親鸞聖人も『教行信証』に、行の巻のところに覚りをちゃんと書いています。「誓願一仏乗」、「一乗海」。「海」です。覚ったのではなくて、「海のような広い世界に目を開かされた」。これが浄土教の覚りの名前になっています。ここに世親がまあ素晴らしい偈を歌ってくれたと。僕は、今まで世親は偉い人とは思っていたけど、これほど偉い方だとは思わなかったのです。最近、この人はよう出てくれたと。「私たちは海のような仏様の世界にあるのよ」と、それに気づかないだけだから、「海の中にあるのだ」と、だから「四海のうち皆兄弟だ」と、こういうふうに言うでしょう。あれが浄土教の覚りの名前なのです。それがなければ仏道にならない。それがあから、さっき言ったようにくだらないことで苦しんで、つまらないことで、つまらないことではないが、真剣に生きれば生きるほど行き詰って苦しくなる、人間は。どうにもならなくなって、「ああそうや、もうこれは、考えていることはもう何も間に合わない、(海のような)仏様の世界にあった」と思うて初めてちょっと救われた気がする。それが大事なよ。分かりますね。分かるでしょう、言っていることは。あの、家内が白血病でね。5月からね。まあそれは難しい、白血病の治療は。このあいだ3回目の抗がん剤、抗がん剤でしかもうだめなのです、手術できないのです。年がっているから。「抗がん剤でだめだったら、もうだめです」とはっきり言われているから。だからまあ最初の頃は「だめかな」と思っていたのですが、このあいだの3回目の抗がん剤はひどかった。あと、40度弱の熱が、39度以上の熱が二週間続いたのですよ。それはもう本人は泣いてばかりいるし、寒いと言うか何というか、「お父さん、奥歯がガチガチガチガチしてもう合わんのよ」と。毛布をこうして噛んで、耐えて、だけど最後には「もういい」と言いました。「もう連れて帰って」と。「私はもうこんなにしんどかったらうちで死ぬ」と言われてね、もうどうしますかそんな。「頼むから俺のために生きとってくれ」と言っ私は拜んだよ。「頼むから」と言っ、そして「もうこうなったらしょうがない」と、「もういろいろ考えるな」と、「仏さんに任せなさい」と、「南無阿弥陀仏と言っ全部任せてしまえ」と言っしかなかった。それを「分かった」とは言わなかった、奥さんは。「そう言うけど私はなかなかそうならんのよ」と言っつつたけど、それでも「言うことはよく分かる」と言っしていました。「その通りやと思う」と。「だけど根性がどうにもならんのよ。」と言っ、人間の根性が死ぬまで抜けんということを一生涯懸命彼女は言うつつた。その通りや。その通りやけど、「最後には仏さんに任せい」と、「もうしょうがない」と、「色々考えても辛くなるだけやから」と。初めて何か仏様の大きな世界にあるのだから、もうしょうがない、任せなしょうがないと言っしかないでしょ。そういうのが、この仏様の世界にあるよという勇気をいただく、元気のもとやね。と思っます。それを「海の譬え」として説いて下さったところに世親菩薩のありがたいところがあるのよ。最近、特に私はそう思っます。ちょっと休憩しましよ。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 (休憩)

---

## 講義 2

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

もう少しお話をさせてもらいます。ちょっと先程申し上げましたけども、今、四回目の抗がん剤が終わりまして、先生が努力してくださって、今度は熱が出ないようにしてくださって、何とか助かりそうになって来たので、少し気が楽になりました。やっぱりしんどかったです。そしてさっき言ったように、熱がひど

い時には「もう連れて帰ってくれ、私はもう家で死ぬ」と言うから、「俺のために頼むから生きてくれ」と祈るような気持ちで、先ほど申し上げたようなことを言ったのですけども、「そうはなれないけれど、あなたがそう言ってくれて気が楽になった」と言って、「頑張るから」と言ってくれて、嬉しかったです。「なれんけど、分かる」と。

私の先生(松原祐善先生)が、ある時、私のような学生に、年が40歳ちがいましたからね、あんなことをおっしゃるとは思わなかったけども、ぼそっと、「私は50歳前に結核になって、城端の結核療養所で血を吐いて、もうこれで終わりや」と。あの頃結核になったら終わりでしたからね。友達がみんな来て「お前、ここを死に場所と思え」と。あの赤尾の道宗さん、近いんですよ五箇山がね、城端から。赤尾の道宗さんを先輩と思って、ここで親鸞聖人の教えを人に伝えて、それで死んで本望じゃないかと、こう言うてくれたけど、おれはそう思えなかった。とにかくもう「死にたくない」と思って「死にたくない！」と叫んだんじゃとおっしゃってね、「こんな偉い先生が、学生の前でそんなこと言うなよ」と思ったけれども、「死にたくない」と叫ぶしかなかったんじゃと。「けどな、その時に、法蔵菩薩がな、そういう人のために身を捨てた」と。「五劫も思惟し、兆載永劫も修行している」と。「そして南無阿弥陀仏になってこっちに来ると言うことがな、本当にありがたいと思えた。」と言うて合掌しておられましたね。まあ、そんなものじゃないでしょうかね。

この世親のこの偈を、親鸞聖人が註釈をしておられます。前に一度読んだと思いますが、もう一度、何度申し上げてもいいと思いますので、もう一度申し上げますと、544ページの最初から5行目(西692、島19-9~)、「功德大宝海」、この「海の譬え」について親鸞聖人はこんなふうに註釈をしています。「**大宝海は、よろずの善根功德みちきわまるを、海にたとえたまう**」。「よろずの善根」と言うのは、仏様のすべての善根、仏様の全ての智慧、必ず仏になる、そういう功德をすべて満たしてくださっている、その世界を「海」に譬えてくださった。「この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、**金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり。**」

「大宝海」と言うのは仏様のはたらきがすべて満たされた世界で、海に譬えてくださっている。「この功德をよく信ずるひとのころのうちに」、信心に、「すみやかに」、すぐに、「とくみちたりぬ」。信心を持った人の根源的な志願を満たしてくださる。

皆さん分かりますね。私たちは説明するのはややこしいけども、この仏様の世界は一如ですから、比べるということを超える世界ですね。そうすると、「誰とも比べなくていい、人間に生まれて来てよかった、私が私でよかった」と初めて言えるものに出遇ったと。それが「すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり」ということ。だから人間の根源的な志願、願いに答えてくださるものこそ、この「大宝海という覚り」なんだと。だから金剛心を得た、信心を得た人は、自分の努力とか自分が求めているとか、そんなことと何の関係もなく、仏様の功德の大きな宝のような、そういうはたらきが我が身全体に満ち満ち。だから大宝海と譬えているのですと、こういう註釈ですね。分かりますね。もう少し卑近(ひきん)に言えば、身はそうならんでも、そう言われたら、ちょっと気が楽になった。ああそうか、今まで自分の考えの中だけにおったけど、それが少し破られて広い世界におるのだと、ああちょっと気が楽になったと。それでもいいと思う。

しかし親鸞聖人はこういうふうに言っておられる。同じことを何度も言ってますので、例えば543ページ、さっきの「我依修多羅 眞実功德相」の眞実功德の註釈なのですが、543ページの最初から4行目です(西690、島19-9)。ここを読んでみますよ。「我依修多羅 眞実功德相」と世親が言った「**眞実功德ともうすは、名号なり。一実眞如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり**」。「一実眞如の妙理」、分かりますね、相对分別を超えた一如の世界、そこに私たちの志願が円満する。だから大宝海と譬えたのだと。「**一実眞如ともうすは、無上大涅槃なり**」。無上大涅槃と言ってもいいと。「**涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如来なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり**」。分かりますね。どんなものも差別しない大きな海のような世界に、どんな人も平等に隔てなくあるんだと、だから大宝海と譬える

んだと、こういうふうに言ってます。

その次のページ、544ページ、ここにも5行目のところに、「大宝海」は、よろずの善根功德みちきわまるを、海にたとえたまう。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、「よく」というのは「能」ですよ。「能令速満足」の「能」。「この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり」。こういう言い方ですね。これは完全に涅槃の覚りだと親鸞聖人がおっしゃっているでしょう。私が言っているのではなく、親鸞聖人がそう言っている。一如の覚りだと、一如真実の覚り、空の覚りと言ってもいい、そういう覚りを悟ったと言わないで、「能」如来の方からよく、「令」これはせしむる、ですから如来の方から能く信ぜしめて、「速」すみやかに、こういう意味ですね。如来の方からよく信ぜしめて、速、すみやかに我々の根源的な意欲を満たしてくださる。これが功德の大宝海です。

こう言うふうに私たちの能力で覚るのではないけれども、法蔵菩薩の御苦勞が初めて届いた時に、私の先生が言うように「死にたくない」と、「俺は死ぬのはいやじゃ」と、「どうしても死にたくない」と叫んで、「どうにもならなかった、自分では。けどその時に、そういうものを救うために法蔵菩薩が本願をたてて、五劫思惟して永遠に修行して、そして何とかして仏様の世界を手渡したい、そう説いて下さっている『大経』の、あの本願の教えが初めて身に響いた。「ああ、俺のためにたてられと思ったと思うと、有難くてのう」と言って、涙を流しておられたことがありましたね。分かりますね、「能、令、速、満足」、これです。如来の方から能く満足せしむる。功德大宝海。

それは先ほど申しましたように、もうみなさんだいぶお年でしょう。もう死ぬぞ(笑)。コロナでなくても死にます。だからコロナ、コロナと言いすぎだと僕は思います。その時に、いつも言うように「ああ人として生まれて来てよかった」と言いたいよ。そして善いところも悪いところも、辛いことばかりやったけど、「まあ、俺はこれでよかったんだ」と。やっぱり自分の人生に自分で手を合わせて死んでいきたい。そういうことを満たす世界、比べなくていい世界、青い色は青い光というように比べなくていい世界に今おるのだと、もともとあった世界に目をひらきなさいと、その御苦勞が法蔵菩薩の御苦勞だと。

『大経』がなかったら、それはもう私たちのような凡夫は救われる道がない。南無阿弥陀仏と称えて、なぜ南無阿弥陀仏がここまで来ているか、それはお前を救うためやと、苦勞したのだと、それが『大経』に説かれている本願の御苦勞だと、それが分からんかねと言わんばかりに親鸞聖人が、こういう今言ったような註釈を付けているわけです。しかし、それをもう少し分かるように言うと、今言ったように、「私が私でよかった」と言って、自分の人生に手を合わせて、嬉しかったと言えるようなものにまでして下さる世界、それこそ涅槃であり一如であり功德大宝海。それは能・令・速と、如来の方から能く令(せしめ)るのだと、それが浄土教の覚りの名前だと思います。

だからよく世親菩薩が「能令速満足 功德大宝海」と、よくこういう偈を歌ってくれたと思って、世親と言う方は偉かったと思いますよ。申し上げていることはお分かりいただけますね。

菩薩ですから、まるで自分の努力で覚りを悟ったんだと思うわけです。ところが世親菩薩は、いいですか、菩薩道と言うのは、修行を重ねて行って菩薩になって、そして覚りを得て、その覚りを他に伝える自利利他が満足する菩薩になることですね。ところが、菩薩道と言うのはもともとは浄土教とは無関係です。浄土教と関係ない、阿弥陀如来と関係ない。浄土はいらないのですから。だから努力して、修行して、最後には空を覚って自利利他を実現すると。これが菩薩道ですから、世親以外の菩薩道を説いている人たちは阿弥陀の浄土とか関係ない、それは。六波羅蜜の行とか、止観行、それが完成すればいいわけですから、だからもともと無関係なわけですよ。ところがね、世親菩薩は、阿弥陀がなければ覚りはえられない。もうちょっと言うと、本願に遇わなければ、能・令・速と、如来の方から開いてくださる本願に遇わなければ覚りは得られないのだと。始めからそれがあつたわけですよ。だから自利利他が実現するのは弥陀如来の本願力によると曇鸞大師が註釈するわけです。

つまり普通は菩薩道というと、「覚りを悟って、それを他に伝える」と簡単に言うけど、では「覚りを悟れるか?」、「覚りなんか悟れない」というところから出発しているから、阿弥陀如来がいるんですと言っ

て、菩薩道と阿弥陀如来とを一つにしたのは世親菩薩だけです。文献学の先生たちは、世親菩薩は『観経』を読んでいないために、自力無効という「機の自覚」という言葉がないと。だからあの人は「機の自覚」がなかったんだとおっしゃるけど、そんな馬鹿なことはありません。徹底的に、さっき言った、どうしても救われないということを通して、初めて、法蔵菩薩のあの神話が自分自身のものになるわけです。宿業の身に泣いて、そして初めて法蔵菩薩と感応道交する。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」(『歎異抄』後序、640頁、西853、島23-13)、こう言うでしょう。

だからいいですか、浄土教は仏になっていく道なんだけど、自力で仏になる道じゃなくて、いいですか、もうはっきり言います。「浄土教は宿業の身に帰って本願に帰する道」です。「仏になるのは本願力による」。聖道門は努力して仏の覚りを得る道です。浄土教は違う。「宿業の身に帰って、凡夫の身に帰って本願に帰依する仏教」です。仏になるのは「能・令・速・満足」、如来の方がしてくれる。だから心配するなど。その辺を間違えないでください。分かりますね、言ってることは。

ですから、宿業の身に帰って自力無効ということがなければ菩薩道そのままいいわけです。ところがどうしても阿弥陀如来の覚りがいるのだと、阿弥陀の浄土に生まれて、如来の自利利他を頂かないと私たちの自利利他ははっきりしない。みなさんどうですか？ どんなものになりたい？ 救ってなんですか？ ねえ、そういうことが人間には本当には分からない。

今まで人生、皆さんたいがい長いこと生きて来とるやろう。そんだけの顔しとつたら(笑)。その都度その都度、ふざけたことは一遍もない、尺取虫みたいに一生懸命頑張って生きて来たに違いない。その都度その都度、その条件の中で頑張らなければならないことに頑張って来た。けど、それが全体を貫く真実と言うものがない。いつもその場所その場所で自分の力で努力して頑張って来た。少しもそれが本当のものになるかどうかというものは何もない。時には金儲けのときもあったし、時には地位と名誉が欲しいと言う時もあった。それから時には食うことに苦労して戦いになったこともあった。その全体が一体何になりたいのか、どうになりたいのか、それが人間には分からないと言ったのが世親菩薩です。

僕は金持ちになりたかったよ。あの消防ポンプで生まれたから(笑)。しかし、あの ZOZOTOWN(ゾゾタウン)のおっさん(宇宙旅行)見とつたら気分悪いな、あれ(笑)。なんかね気分悪い。ああやっぱ金持ちにならんでよかったと思うて。金持ちになりたかったけど、金が入ったらどうなるかと言うと、あんなになるんや。あれまさか救いとは思えんね。あれどうしていいか分からんのやろうね、きつと。あんなことばっかりして。つまり、私たちの、その都度その都度思ったことが実現したとしても、さっき言った命の底から満足するものは一つもない。そう言うことですね。

本当に命の底から満足するような救いは人間の方からは分からない。だから法身が、色もない形もない法身の方が立ち上がって、「あなた達の救いは浄土にあるのです」と教えてくれた。浄土にあると言うのは、比べる必要のない者になりなさいということです。それが救いなのだということを仏様の方が教えてくれている。それが浄土教ですよ。その浄土にどんな人も生まれるようにと言って、「南無阿弥陀仏」にまでなって、私たちのところにまで来てくださっている。念仏を称えなさい、念仏をしなさい。必ず念仏によって仏様の世界を思い出すから念仏しなさいと。名を称えるということは、ただ名を称えているだけでなく、「関係が回復する」のです。

うちの孫、最後の孫や、今はもう小学校3年生になって、大きくなって面白いけど(笑)、生まれたときに「大ちゃん」と言って、大きい「大」という名前をつけて、大、大、大と呼んでたら、自分が「大」ということが分かるんやね。そしてジジやババが分かるようになると、近寄って来て「じいじ、じいじ」と呼ぶや。そしたら、「おおう、大ちゃん、大ちゃん」と言ったらめちゃううれしそうな顔をするわ、こうして(笑)。つまり、名を呼び合っているだけなんやけど、それによって人間の間接を確認しているわけや。ある時、これは本当の話ですが、大が来て「じいじ、じいじ」と言うから知らん顔をしていた。そうしたら「じいじ、じいじ」と大きい声で、こうしてたたいて、それでも知らん顔しとつた。そしたら、悲しい顔して向こうに行って「わあ～あん」て大きな声で泣き出した。ほんとほんと。それは呼んでも関係が回復してないと感じた

んやね。

だから名を呼び合うということは、これは、ただ名を呼んでいるということではなくて、名を呼ぶことによって「関係をいただく」、「関係が回復する」という意味。だから、皆さん仏さんの世界におったんやけど、忘れとるから、「念仏しなさい、名前を呼びなさい」と、「必ず仏さんとの関係が回復するから、だから念仏しなさい」というふうに言うのです。だから「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えることが大事。そして、今言ったように、人生の中で何度もぶつかることがある。その時に名の意味が分かる。何のために名が立てられたのか、「私のためや」と親鸞は言う。私のためって何やと言ったら、それは救われない私のためやと。救われないということはどういうことやと言ったら、いつも宿業の身、宿業の身ということは、有限の制約の中であって、その制約の中から一步も出られない。だから苦しい。それを救いたい。それが如来の大悲ですね。それが届いたと言うのが、この「能、令、速」という世親の言葉なのです。ここがとても大事だと思います。

そして、まあ、ついでですが、『論註』を見てみましょうか、その「能、令、速」の一番最後のところにね、聖典170ページの、観仏本願力があって、その後、『論註』引文の一番最後に、「いかんが回向する」という文章を親鸞聖人が引くでしょう(西159、島12-19)。「いかんが回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして」、これですよ。法蔵菩薩が一切苦悩の衆生を捨てないで「心に常に作願すらく」、心にいつも思っておられた。「回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえにとのたまえり。回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功德をもって一切衆生に回施して」、名号と信心を私たちに与えて、「作願して共に阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまえるなり」。この文章を持ってきているでしょう。ですから、この「観仏本願力」を能・令・速と満足せしめてくれるのは法蔵菩薩の回向に由るのであるよと言うので、この回向の文章を最後に持っているわけです。

もともとは、これは菩薩の回向ですから、まあそういうことを言うとまた混乱するかもしれないが、この中にやっぱり勉強している人がおるからね、これはもともとは菩薩の回向だから、ところがこの菩薩の回向に全部親鸞聖人は尊敬語を付けている。「いかんが回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得る」なのです本当は。ところが「成就することを得たまえるがゆえに」という尊敬語。そして「とのたまえり。回向に二種の相あり、一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功德をもって一切衆生に回施して、作願して共に阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしむ」なのですが、「往生せしめたまえるなり」、尊敬語。こんなふうに、もともとは菩薩道の回向行だったのですが、親鸞聖人が『教行信証』に引用するときには、全部尊敬語を付けます。

尊敬語を付けるということは、如来のはたらきだということです。世親と曇鸞の『論註』は菩薩道として説かれていますから、菩薩がいかにも修行をして回向してと表向きには説かれていますのです。ところが、それを親鸞聖人が引用するときには尊敬語を付けて、全部、法蔵菩薩に読み替えていく。ここはそうなってますね。ですから「能、令、速」と私たちに「大宝海」を与えてくださるのは、これは法蔵菩薩の御苦労によるのだと。共に浄土に向かおうとする往相の回向。往相の回向と言うのは、11願、17願、18願の回向。本願。往相の回向。行信と証の本願成就文です。44ページのね。あれが往相の回向です。その往相の回向によって、「能、令、速」と如来の方から私たちに覚りを得させしめてくださる。それが浄土の覚りなのですよというのが、ここの一番の眼目になるとこかなと思います。いいですかね、それで一応。いいですかね。

小さく読んでいくと、今申し上げたことを細かに言っていくことになります。最後のまとめは、だいたい、今のようなところでまとめますので、それで、ここは過ぎていきましょう。ずっと読むと百歳までかかると思います(笑)。

それで今度は、あつもう時間ないね。それじゃあこの次の予告編。今度は道綽禅師から始まりますね。曇鸞、道綽ですから。ですから、ここから今度は『観経』の祖師たちになります。道綽の『安楽集』は、もっぱら『観経』の註釈ですね。ですから道綽は『観経』の祖師ということが出来ます。そして皆さん「正信偈」でお分かりのように、「道綽決聖道難証」(東聖典206頁、西206、島12-52)と、聖道門と浄土門を分けて、そして聖道門は成り立たないとはっきり言ったのだと。今までは浄土門と言うのは聖道門

の中に念仏する人が何人かおるという話で、大きな本道は大乗の仏教だと、こう言うけど。あのね、今日、僕は車の中で話をしている、僕はそういうことを言ったことないかなと思って、さっき「与仏教相應」とあったでしょう。「仏教と相應する」。『願生偈』を読んで、表向きには仏教と相應するということですが、仏教は、いいですか、この相應と言う時には、知っておいてほしいのは、「機教相應」(ききょうそうおう)。「機」と言うのは人間ですね。「教」はお釈迦様の教えですね。お釈迦様の教えを受け取るこっち側の問題を、まあはっきり言うと、無視しているのが聖道門です。

聖道門は、この「教」、これについて膨大な教理学を立てている。教えについて学問をよくして、そして完璧の教理学、学問体系を立てている。ところが、それをいただいた自分はどうなっているかということが全くどこにも見られない。だから教えとしては完璧であってもね、それを本当に「身としていただいているか」と言うと、いつもすれちがっている。それを指摘したのが道綽です。これはまたこの次お話ししますけどね。分かるでしょう。末法において、今の世において、本当の教えは何か、それは、道綽は『大経』『観経』『阿弥陀経』の浄土の三部経しかない。それは私が凡夫だからだ。浄土教はちゃんとそれを言うでしょう。それを「機教相應」と言います。機と教えとが箱の底と蓋のようにきちっと合わないと箱にならない。それを教のところだけで完成させていっているのが聖道門だと考えてください。完璧です理論としては。理論としては完璧だけでも、理論では救われない。むしろこっち側の機の方から言えばお手上げだと。理論が間に合わなくなって、そして初めて法蔵菩薩の御苦労が感応道交する。

だから、「時は末法、機は凡夫、自力無効」、それがなければ教と相應しない。まあ百歩譲ってお釈迦様が生きておれば聖道門は有効かもしれません。まだお釈迦様に聞けるから。ところが道綽が言っているでしょう、世はもう末法でお釈迦様に会うことができないからお釈迦様には遇えないと。それからさっき言った「覚り」と言っても、空想しているだけで覚りかどうかわからない。何が覚りかわからない。何が覚りかわからないのに一生懸命修行すると言ったって、そんなものは成り立つわけがないということ。道綽が初めてきちっと明確に言ったわけです。だから親鸞聖人は道綽のお仕事をまずは、「道綽決聖道難証」と。これはね、私たちからすると「あ、そうか」と思うけど、これは大乗の大きな歴史からすると、とんでもないこと言ってるからね。だから迫害を受けるわけです。やっぱり法然がそうだったように、親鸞がそうだったように、いつの時代でも迫害を受けてしまう。それは常識外れだからやね。そういうお仕事を道綽がなされた。それが、まず第一のところですよ。

ところがね、せつかくやからもうちょっと言うところ。今日帰って、もし復習や予習をするなら、道綽のところの引文を見てください。行は全部「念仏三昧」になっています。帰って道綽のところの引文を読んでみてください。全部「念仏三昧」になっている。ところが善導大師になると全部「称名念仏」になっています。親鸞聖人は意図してそういう引用をしている。『安楽集』の中にも「称名念仏」という言葉は何度も出てきます。ところがあえてそれを引かないで、「念仏三昧」で統一しているということは、おそらく道綽のところでは「称名念仏」ということが決定していなかった。それを決定させたのは善導大師です。道綽のところでは聖道と浄土とを分けて、今の世においては浄土門しか成り立たないという「独立宣言」をした。ところが教学としてまだ完成していなかった。「念仏三昧」と言うわけですね。

教学として「独立宣言」をした道綽を教学として完成させたのが善導だから、善導のところになるとはっきり「称名念仏」というふうになっていく。「称名念仏」と言うのは皆さんご存知やね。「下品下生」、ここに「機教相應」ということを教学として明確にした。それが善導大師です。こういうふうになっていますから、よく帰って見てみてください。それはとても大事なことよ。一応、予告編にしておきます。

今日は曇鸞大師のところまで終わって、そして『大経』の仏教は「往生」というよりも、浄土の根拠は「法身」やね。「法身は色もなし形もましまさず、その法身より方便法身として法蔵菩薩として形を表して浄土を立てた」と。だから浄土と言っても、浄土の根拠は、それは仏様の法身の覚りだと。だから『大経』は「浄土往生」ということを説くけども、もっとはっきり言うと、「浄土往生はこの法身を与えるため」です。「必ず仏になるということを決める」。それが『大経』の教えなのだとこのことを言うために、『大経』のところでは「涅槃」、「一如」という、こういう覚りが前面に出て来ているわけです。

親鸞聖人は、この『大経』によって『教行信証』を書いていますから、皆さん「正信偈」を読むと分かる

でしょう。「往生」という言葉は一度も出てきません。「証知生死即涅槃」。「惑染の凡夫が信心を起こせば、生死即涅槃を証知する」。これは大乘仏教の覚りでしょう。それから「能発一念喜愛心」、「一念喜愛の心を起こせば、煩惱即菩提である」と。これは大乘仏教の覚りそのものです。そんなふうに親鸞聖人は『大経』に立った仏教者ですから、「往生」と言う言葉を使わないで、「往生」の根拠にある覚りそのものに直結するのだということを単刀直入に言い切るのが親鸞聖人だというふうに覚えてください。

ただし、これから『観経』を勉強しますから、凡夫ですから、覚りを悟ったと言えないから、死ぬまで凡夫の身を生きなきゃならんから、それは「往生」としか言いようがないのです。覚りの世界に帰っていくという歩みとしてしか言いようがないからね、「往生」と言うけども、しかし信心が決定した時は如来の世界を頂くのだ。「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」。「一心帰命」と言う時には「如来の覚り」。「願生安楽国」と言った時には「浄土」。これが意味を持ちます。二つ分けて考えなければいけません。『大経』は分けて考えているから。

だから、「一心帰命」と言う時には、さっき言った「一如の覚り」に私たちは目を開かせられる。それが信心を頂いたことだと。ところがそこから今度は歩みが始まるから、歩みが始まった時には覚りの世界を頂いたけど、これ、「身」が覚ったわけじゃないから、気が付くとまた金の計算したり、人の悪口言うたりして生きてるでしょう。「何か知らんけど、何というあほな奴やな」と思いながら生きていく。その時には浄土が鏡になって、「そんな生活しとつたらあかんよ」と言って、鏡なっていくから「願生安楽国」、浄土と関係する。そんなふうに「一心帰命」と言う時には「覚り」、「願生浄土」と言った時には「浄土」が意味を持って来る。その二つの契機を顕かにしているのが『大経』です。有難いと言うか、死ぬまで捨てないと、凡夫のまんまでいいから頑張んなさいと言って下さっているのが『大経』ですね。

まあ今日は一応これでおわりましょう。ありがとうございました。

## 質疑応答

先生・・・もし何かございましたら。

質問者 1・・・よろしいですか。先ほどの質問に続いて。まだ分からないのかと言われそうですけど、ちょっと質問するのこわいんですけど、先生が言われたことをもう一回繰り返しますけど、違っていたらご指摘下さい。親鸞聖人は『浄土論』からは、「我依修多羅」と、これは「帰敬偈」ですかね。

先生・・・「発起序」です。

質問者 1・・・「発起序」ですか。親鸞聖人は『浄土論』からは「発起序」と不虛作住持功德と回向の文章の三つしか引用してない。

先生・・・はい、そうです。

質問者 1・・・二道釈と「帰敬偈」（「世尊我一心～」）が『論註』の引用にはないけど、それはどこにあるのかということでしょうか。

先生・・・『論註』の引用ではなく、『論』（『浄土論』）の引用にはないのです。

質問者1・・・『論』の引用にはないけれど、それが龍樹のところにあると先生はおっしゃったのですが、その龍樹のところにあるというのは聖典のどこでしょうか？

先生・・・それは前回の講義の時に申し上げましたが、龍樹の最後の引文が「弥陀章の偈」で終わっています。東聖典166ページに、「無量光明慧、身は真金の山のごとし。我いま身口意をして、合掌し稽首し礼したてまつると」。前回の講義の終りの時に申し上げましたが、その次は、「人よくこの仏の、無量力功徳を念ずれば、即の時に必定に入る。このゆえに我常に念じたてまつる」。これは龍樹の言葉ですけれども、いいですか、これを親鸞聖人の言葉で言えば、前者は「光明無量」、後者は「寿命無量」です。ですから親鸞聖人の「正信偈」で言えば「帰命無量寿如来 南無不可思議光」にあたりますよと。内容はそうでしょう。西藤君言っていること分かる？

質問者1・・・いえ、分かりません(笑)。沈黙してます。そう言われたような気が致します。

先生・・・「無量光明慧～」166ページの3行目、「今、私は阿弥陀如来の無量の智慧の光に遇いました。その阿弥陀如来は真金の山のごとし、だから私は今、体全体を持って合掌し、足に稽首し、礼拝するのです」。これは「南無不可思議光」にあたります。その次、「人よくこの仏の、無量力」、「無量寿如来」、「無量力功徳を念ずれば、即の時に必定に入る」。「分別を超えて、二律背反を超えて、無量寿というのちに立つことができた。智慧の光によって。だから即の時に必定に入る。空の覚りに必ず帰って行く者になった」。これは親鸞聖人の言葉で言えば「帰命無量寿如来」にあたります。ですから親鸞聖人の言葉で言えば、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」から始まるのが、この「弥陀章の偈」の最初ですね。それは世親の言葉で言えば、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」にあたるわけですね。どちらも「阿弥陀如来に帰依します」ということです。五体投地して「阿弥陀如来に帰依します」と頭を下げたお姿から始まるのが龍樹の「弥陀章の偈頌」だから、この「弥陀章の偈頌」は、今言ったように世親の『浄土論』の「帰敬偈」、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」にあたるのですと。

質問者1・・・先生が言われた親鸞聖人の「帰命無量寿如来」と「南無不可思議光」は世親の「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」にあたるから、「帰敬偈」に相応するところはここにあるということですか。

先生・・・そうそう、だからここが、聖典167ページの『浄土論』に曰わく、我依修多羅～と続く。そういう引用の仕方を親鸞聖人がしている、ということ申し上げました。

質問者1・・・龍樹のところに二道釈も引用しているのですね。

先生・・・二道釈はどこにあるのかと言うと龍樹の易行品のところにあります。ですから、二道釈と「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」という「帰敬偈」のところはどちらも龍樹のところにあるのです。だから龍樹と天親を一つにして、それを全部包んでいるのが『論註』だと親鸞聖人は言っているのです。「実は、曇鸞が龍樹と天親の二人を一人の人と見ていたのですよ」と言う引用の仕方になっているのです。

質問者1・・・二人を一人にしてということが、私を含めて皆さんピンと来ないと思うのですが、その「一つにして」とか、「一人にして」というのが、どういう事を先生がおっしゃっているのかよく分からないのですが。

先生・・・いいですか、『論註』の引用は二道釈や「帰敬偈」、「発起序」と不虛作住持功徳や回向です。で

すから『論』もその順番であればよく分かる。『論註』は『論』の註釈ですから。

質問者1・・・でも、そうではないのでしょうか。

先生・・・そうではなくて、『論』の引用は「我依修多羅」からしかありません。二道釈や「帰敬偈」はどこにあるのかと言え、これは龍樹のところにあります。そうすると曇鸞は龍樹と天親を一緒に見ていると、こういうふうになるのです。

質問者1・・・二道釈と「帰敬偈」は龍樹のところ、「弥陀章の偈」にあるのですね。なぜ、それが一つと考えているということになるのですか。それが先生、僕ら素人に伝わっていません。

先生・・・いや、それは君が分からないだけです。みんな分かっています(笑)。そもそも君は屁理屈をこねて仏教を分かろうとするからややこしい。いいですか、「帰敬偈」というのは「阿弥陀如来に帰命する」ということです。龍樹は「本願に帰した」と言っている。君は量として考えるから、分別理論として考えると、ひょっとしたら納得いかないかもしれない。しかし質として考えると龍樹と天親は同じなのです。龍樹は帰敬しているし、世親も帰敬しています。

「帰敬偈」から龍樹が始まるということは、世親も同じだから、世親の「帰敬偈」も龍樹の「帰敬偈」も一緒です。『大経』を介してではなく、本願に帰依して、阿弥陀如来に帰依しています。そこにおいては一つです。それが分からないと、理屈だけでは分からないかもしれないが、理屈でも分かるように親鸞聖人は書いているから、今日から一週間考えてみなさい。皆さんの方は分かりますね。

質問者1・・・今回のところは何回か録音を聴いてみます。ありがとうございました。

先生・・・引用の仕方がそうなっているでしょう。これは頭で考えようとするとなかなか難しいかもしれない。しかし、今言ったように「弥陀章の偈」は「帰命無量寿如来 南無不可思議光」で始まっています。だから、もう少し言うと、親鸞は「僕も一緒だよ」と言っている。龍樹も世親も私も一緒なのだと言いたいのです。だから『教行信証』は論書なのです。もう少し言うと、そういうところまで行きます。

質問者2・・・よく「信心獲得」ということをお聞きしますが、そして、それは私たちの責任であるということをおっしゃいます。私たちの責任になったら、やっぱり自力も入ってくるということですよ。だから「信心獲得」ということはどう言うことかなと思ったのですが、結局『観経』と同じで、「至誠心あるか、深心あるか」と言われますけど、結局、私たちの、自分で内面を見なさいという、そういうことになるのでしょうか。

先生・・・最初からお尋ねになったことに応えますね。聖道門ではさっき言ったように覚りを悟ると言うわけです。道元もそうですね。覚りを悟ったというわけです。

ところが浄土教は凡夫だから覚りは悟れない、という事が基本的にあるから、覚りを悟ると言う言葉は一切使いません。そのかわり使うのが「他力の信心」です。この他力の信心というのは、今言ったように、覚りの世界に目を開かされた、その心を表す事が出来ないから、「阿弥陀如来を信じます」という言葉で表現する。だから信心と言っても、私たちの精神生活ではなくて、阿弥陀如来の覚りに目を開いた、初めて目が開かれた、その心を「他力の信心」とか「金剛心」とか「本願力回向の信心」と言います。

質問者2・・・自分を掘り下げて見るとか、自分に出会うとか、そういうお話を聞きますけど、それは信心とは言わないですか。

先生・・・いやいや、信心ですけれども、いいですか。自分を掘り下げるとか、自分を尋ねるとか本気でや  
ってごらん、気が狂うから。私はやった。人間には自分を内に見る目はありません。ありません。もしあ  
るとすれば本願にあります。本願が人間の内を見て、地獄、餓鬼、畜生はそこにあるぞと。本願だけが  
人間の内を見えています。だから基本的に仏教はあなたがおっしゃるように内観道です。

内観道だから内を見るとか自分を見るとか言いますけども、そんな事が出来るなら出家したらいい。  
そんなことをしたら気が狂う。私は気が狂いました。つまり、人間には内を見る目はありません。はつき  
り言います。ところが本願だけは人間の内を見えています。地獄はそこにある。お前の内にある。人間と  
いうところに如来に背いているということがある。お前には分からんかも知らんけど、私はよう分かっ  
ると。お前の内を見るとそうになっている。というふうには本願が「内観道」を完成してくださっています。だ  
から「本願の教えを聞く」ということが大事になって来る。それによって内を知らされていくということが大事  
になってきます。それが真宗の教えになります。

質問者2・・・それじゃあ先生、自分で気が付いたようであって、それは本願の教えによって気付かされた  
のですね。

先生・・・そうそう本願の教えに遇わなければ、よく分からない。自分では分かりません。

質問者2・・・自分では分からない、本願を通して初めて分かる。

先生・・・そうそう、本願の教えに遇っていくことね。よく聞いていくこと。それは、「ああ、私が分からな  
かった自分の内のことを言ってるのだ」と、あるとき分かる時が来ます。

質問者2・・・先生、私は仏法を聞いてない若い時にですね、あっと気が付いたことがあって、人生が変  
わるような気がしたことがあったと思うのですけど、その時代、仏法を聞いてなくても、やはり本願はは  
たらいているということでしょうか。

先生・・・ああそうです。ですから、もし、そういう体験が少しでもあれば、それをもとにしながら親鸞聖人  
の教えをよく聞くこと。体験の意味が分かって来ますから。そこまできちっと分かって来ると自信になり  
ます。もうちょっといい顔になると思う(笑)。

今、おっしゃってくださったこと、とても大事なことをおっしゃっているのです。「内観道」ということね。  
だけど人間には内観道はないのです。本願の教えにだけあるのです。それが浄土教のすばらしいこと  
です。そこを分かってください。

質問者3・・・先生、不虛作住持功德の「虚作」というのは、私たちが虚仮というか、虚を積み上げていく、  
そういう凡夫としての有様そのものであるという、そういう解釈でよろしいのでしょうか。

先生・・・うん、直接的には「不虛作」というのは「虚作ではない」、虚作ではないと言うのは、何が虚作で  
はないかと言うと、「仏になるということが嘘ではない」という意味です。人間の中でこうしたらこうなると  
言うことはないのです。良かれと思ってやったことが良くなるということはないのです。良かれと思って  
やっても悪いことになるし、ありやしまった失敗したと思っても、案外良いようにいったなということもある  
し、だから人間の思いの中には、人間の世界では、こうしたら必ずこうなるということは一切ないと。そ  
れが「虚作の相」だと『論註』にそう書いてある。ところが一つだけ絶対間違いないということがあると。  
それは「本願に遇えば必ず仏になる」ということが虚作でない。それが「不虛作住持」です。だから成  
仏が決定する。これが「虚作でない」ということを言っている。

質問者3・・虚作とは自力であるというふうに解釈してもよろしいですか。

先生・・まあ、そう解釈したかったら、そう解釈してください。

質問者3・・ありがとうございました。

先生・・しつこいようですが、「不虛作住持は、本(もと)法蔵菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とに依る」(東聖典198～、西198、島12-45)。仏願によって因の本願と果の仏になるということが同時に実現していく。だから必ず仏になる。本願に帰した者は必ず仏になる。それが嘘でない、それが不虛作住持功德だと曇鸞がちゃんと言っている、僕が言ってるのではありません。本願力によって必ず仏になる。

(会場から) やっと意味が分かりました。ありがとうございました。

質問者4・・今日のお話の中で、「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足～」、ここの不虛作住持功德ですけど、これは私はだいたい「遇無空過者」と言うのは、さっき先生がおっしゃったように、人生が空しくなくなると、こういうふうなことになることと、ただそういうふうに思っていたのですが、今日の先生のお話では、これは『浄土論』の仏莊嚴の中のことから、仏のはたらきのことを言ってるのだなということ。

先生・・そうそう。

質問者4・・で、私が今まで思っていたのと、やや先生のご領解の方が本当だなとちょっと思ったんです(爆笑)。

先生・・お褒めいただきまして、大変恐縮ではありますが、私は私の意見を言っているのではなくて、書いてる通り言っているのですから、おっしゃる通り仏莊嚴にあるでしょう。ですから、仏のはたらきによって、「本願力によって必ず仏になる」ということは嘘ごとではないよということを言っているのです。だからさっき言ったように、浄土教は私たちが仏になるのではなくて、私たちは「凡夫に帰って本願に帰す」。これが責任。仏になるのは「本願力が仏にする」。だから「凡夫に帰って仏に帰す」ということ、これが私たちの責任ですよということを申し上げたのです。

質問者5(O 先生)・・今のお話で「空しく過ぐる」ということですが、「空しく過ぐる」とは「本願に遇わないこと」というふうにいただいてよろしゅうございますか。

先生・・まあ広く言えば、そういうふうに考えても間違いではないと思います。ただね、さっきの方がおっしゃったように、あれは仏莊嚴にあります。ですから仏のはたらきを表しているのであって、それを即自分のところに持って来てはいけません。分際が定まってないから、「機の自覚」が定まってないからそういうことをするのであって、阿弥陀如来にひれ伏した者からしたら、それは間違いです。ひれ伏した者からすると、私たちの分際で考えていいことは、いいですか、「現生十種の益」、そこで考えてください。(東聖典240頁～、西251、島12-83)

親鸞聖人が信心を得たら、私たちは「悪魔や鬼神に迷わされなくなる」、というところから始まりますね。そして最後には、「大悲を行じていく」、で終わります。大悲を行じていくというのは、まあ自分がいただいたものを人に伝えていくということですから、まるで菩薩道の自利利他のように聞こえます。けれども、そうではなくて、そこは凡夫としていただく功德を言ってるわけですから、私たちが「願生浄土」としてこの世で生きていく時には、「現生十種の益」のところで私たちのところは考える。

仏莊嚴はおっしゃった通り、えらいえらい、仏のはたらき。「私たちが仏にするはたらきは如来だ」と言っているわけですから、それをそのまま、「私たちが空しくない」というところにあてはめるのはちょっと早計かなという気がします。分際が違います、土俵が違いますから、その土俵の違いをよく分かってほしいのですが、そこはまあ、しょうがないですね。

質問者5・・・もう一つお尋ねしたいことがございます。「不虛作住持功德」の御文に「遇(もうお)うて空しく過ぐる者なし。よく速やかに功德の大宝海を満足せしむ」という言葉について、『一念多念文意』、聖典543ページ後ろから2行目を見ると(西691、島19-9)、「もうおうてむなしくすぐるひとなし。よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむとのたまえり。」と書いてあって、先生のご説明では、「すみやかに我々の根源的な意欲を満足せしめてくださる」という、そういうようなお言葉があったと思うのですが、その説明の方が分かりやすいわけですが、しかし御文は常に、「功德の大宝海を満足せしむ」という言葉になって出て来ることが多いわけですが、この表現がいたるところで見かけるので、先ほどのご説明の意味はとてもよく分かるのですが、この表現がどうしても、そのご説明と相応しない感じがするのですが。

先生・・・ああそうですか。このあと、「観仏本願力 遇無空過者」の一字ずつの註釈があるでしょう。そうすると「観」は、願力をこころにうかべみるともいう、またしるというこころなり。」と言うのですから、これは信心のことを言っている。「遇」は、もうあうという。もうあうともいうすは、本願力を信ずるなり」。ここでちゃんと書いてますね。本願力を信じるということである。「無」は、なしという。「空」は、むなしくという。「過」は、すぐるという。「者」は、ひとという。むなしくすぐるひとなしというは、信心あらんひと、むなしく生死にとどまることなしとなり。「能」は、よくという。「令」は、せしむという、よしという。「速」は、すみやかにという、ときことというなり。「満」は、みつという。「足」は、たりぬという。「功德」ともいうすは、名号なり。」と、こうありますね。そうするとこれは、「名号によって開かれた功德大宝海という世界を知ること。それが信心だ。」と書いてますね。そして、もう一つは、「それが分かると私たちは速満足する。私たちの志願が満足するのだ」という意味にここはなっているでしょう。ですから、私は先ほどのような言い方をしました。ということです。私の方はね。

質問者5・・・それはとてもよく分かります。ではなぜこのような表現になっているのかです。

先生・・・「よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむと」。「を」がおかしいと言うわけね。

質問者5・・・おかしいとまでは申しませんが、どういう心持ちでしょうかということですか。

先生・・・この場合はつまり、「法蔵菩薩の志願をよく満足した」。「大宝海を満足した」。そういう意味でしょうね。如来の方から見れば、如来の方の功德大宝海に、あらゆる人が気づいて下さった。それによって大悲を手渡す。大悲を首として回向するという事が完成するから。

質問者5・・・言葉面に振り回されてはならないという事ですね。

先生・・・先生のお考えのことは分かりますので、それはだめだとは言いません。「功德大宝海を満足する」と言うのは多分、「衆生が気づいてくれて、初めて功德の大宝海の如来の方が満足する」と、こういう意味に私は取れますけれども、そこはどういうふうにかんがえたらいいか、ちょっとまた、色々教えてください。

親鸞聖人の註釈からすると、「私たちの根源的な志願を満足する。それが仏様の覚りですよ」と言う註釈になっているということと、先程おっしゃってくださった方から言うと、それを知った心、本願に帰する信心、それは、実は、信心として表現しているけれども、「阿弥陀の覚りに初めて目が開かれたときの心、それを信心というのですよ」と、こういうふうに親鸞聖人が註釈してると思います。

先生のおっしゃった「を」は、またちょっと…。

『教行信証』は難しいけど、さっき言った、「本願に帰すれば、龍樹も世親も親鸞も一緒ですよ。それから私たちも一緒ですよ。それから菩薩も一緒ですよ」と、なぜ言えるのか、それをきちっと書いてるのが曇鸞の「不虛作住持功德」です。ですから難しいのだけれども、そこをよく読むと、「やった！」という、「やったぞ！」という感じはあります。まあ、時間があればこれからも来て下さい。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 （「恩徳讃」、終了）

【テープ起こし】安達 洋太郎さん

【添削】西藤隆己さん、

岡田幾太郎先生、

田畑正久先生、

住職